

機械計測による考古学遺物の実測図 作成について

植 木 智 子

-
- | | |
|--------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 4. 計測値の誤差 |
| 2. 機械計測のシステム | 5. 実測図作成過程における機械計測の役割 |
| 3. 計測と編集 | 6. おわりに |
-

論文要旨

考古学の分野において、近年さまざまな先端機器が導入されるようになり、急速、かつ円滑に浸透してきている。遺物実測機械もその一つである。操作は単純で、一般作業員にも扱え、実測作業の効率は使い方次第で飛躍的に向上するのだが、理解不足によってその役割を十分に発揮しきれていない状況を時に見聞きする。実際に使用してみると、予想もしくは期待とかけ離れた図ができ上がるのも、誤解を産む要因となっているかもしれない。操作に慣れ親しむことがもちろん第一だが、その前に機械による実測図作成作業の利点と欠点を、また、機械というとなぜかことさらに気になってしまう数値誤差について、どのような状況下でどの程度出現するのかを明確化する必要性を感じる。

本稿は、3SPACE® DIGITIZER による実測システムを例にとり、計測から実測図に仕上げるまでを順を追って説明し、具体例を示しながら、作業過程で生じ得る誤差と、作業効率について検討したものである。誤差の原因は機械の精度ではなく、ほとんどがこれを扱う人間の側にあるのだが、各作業段階で誤差のどの状況を想定してみると、実際の数値差はきわめて僅かなものである。したがって注意深い作業によって充分回避できることを示した。作業効率は機械実測の最大の利点である。しかしながら、実測作業すべてが担当者の手から離れるわけではなく、どこまでの作業を代替させるかによって、時間的に大きな差が現われる。これは、実測図に対する研究者個人の認識の違いによるが、本稿では筆者が実際に作業を指導したり、自身で作成した図を参考として挙げた。